



にも会津を祖とする方がおいでになるのではないのでしょうか。

会津を舞台にした大河ドラマがスタートしました。白虎隊や娘子隊、藩士の婦女子の自決など会津戦争の秘話は数多く語られております。さらに懲罰的な改易がなされ、不毛極寒の地、斗南で塗炭の苦しみを味わったとされております。

そんな逆境の中から柴五郎は陸軍大将となり、また、山川兄弟の兄、浩は貴族院議員に、年少が分かつて、白虎隊から外されたという逸話をもつ弟健次郎は東京大学・京都大学の総長を務められたといえます。東京大学の構内に優しいお顔の胸像を見ることが出来ます。

十和田市の澄月寺に会津に関する碑があることを思い出し、電話でお話を伺いました。やはり戊辰の後会津を離れて、かの地に安住の地を求めた方々がおられたとの事です。会津会の皆さんが先祖を偲び感謝と供養の碑であると丁寧に教えていただきました。六戸町

会津に関する女性では、娘子隊の中心となつて激戦の中、戦死された中野竹子のことや、津田梅子などとアメリカ留学された山川兄妹の山川咲子(大山捨松)の話は良く知られております。

今回の主人公の八重という女性は何と知りませんでした。夫の新島襄は八重を評して、ハンサム、ウーマンと言つたとか。男も及ばぬ行動派でなかなか進歩的な女性といわれているようです。

もう一人の主役新島襄は私が小学校5年の時、学芸会でその少年時代を演じたのです。後に襄は、函館からアメリカへ出国し、帰国後同志社大学を興すことになるのですが、少年の頃から外国に関心があり、それを母親にいさめられます。それでも関心は深まるばかりで、最後に襄少年は決意の程を清書して高々と読み

上げます。「武士の思いたつたの山紅葉 錦着ずして帰るものかわ」二度読み上げて静かに幕が引かれます。昭和25年、60年も前の事です。折茂新田の吉田よし先生のご指導で演じた劇でしたが台詞の一端は今でも覚えております。袴をつけるつもりが借りられず、モンペをはいて、恥ずかしかったのもなつかしい思い出です。

最後になりますが、私の友人に福島浪江出身の方がいます。実家は代々相馬野馬追いに出て、勇壮な武者振りを披露されている家です。愛馬は北海道に預けたが、数十頭におよぶ牛はそのまま放たれたといいます。それにもまして、未だ居所定まらず、家族離れ離れを余儀なくされ、そこにある我が家に帰ることができないのです。かける言葉もありません。それでも言います。「がんばれ、福島！」。

吉田 竹雄

(六戸中 三十年度卒)